

5 官兵衛の妻・光（てる）

「光」の実像が浮かんできません。

そのため、ここでも司馬遼太郎氏の小説、『播磨灘物語』の記述をお借りします。

司馬氏の想像する「お光像」です。

・・・彼女は、官兵衛より背が高く、鴨居（かもい）で頭を打ちそうな自分の背をつねに苦しめていた。

・・・官兵衛は婚礼のときに、はじめて彼女をみた。式は夜おこなわれた。

その式の夜、薄暗い灯のかげで彼女をみたとき、その背の高さにおどろいてしまった。

婚儀は、双方にむかいあっておこなわれる。官兵衛の敷物は、円座が三枚重ねてあった。それで辛うじてつりあいをとれた。・・・

床入りしても夜中であるためによく分からず、しみじみ顔を見たのは、光（てる）が、庭の柿木の下にいて、侍女に柿を取らせている姿を、たまたま縁側から見たときだった。

（わが嫁は、あのようになつたのか）

陽が、お光のうなじにあたっていたが、その白さは玄妙としか言いようのない印象だった。・・・

司馬氏は、「お光」をこんな風に描いています。

小説では、官兵衛の妻を「お悠」としています。

また光は、しばしば「幸圓」として紹介されていますが、幸圓は歌をつくるときの雅号であり本名ではありません。

本名は光（てる）ですが、光に関する史料は、ほとんど残っていません。

